京都大学	博士(文学)	氏名	千々岩　靖　子
論文題目	アルベール・カミュにおける歴史認識の問題		

（論文内容の要旨）

序論

1994年に出版された遺稿『最初の人間』には、それまでのカミュの小説作品にはない新しい試みが見られる。それまでの小説創造において、カミュは歴史的・時代的なレフェランスを極力排除した「歴史」不在の小説世界を構築してきたのに対し、『最初の人間』においては、単に主人公ジャック・コルムリイの個人の過去だけでなく、ジャックの家族、アルジェリアのフランス人、ひいてはヨーロッパの歴史という集団の過去が書き込まれている。

周知の通り、カミュは弁証法的歴史哲学を批判し続けた作家であった。それまでの研究においても、カミュの小説作品における「歴史」の不在は、「歴史」の神格化に対する作家の批判、あるいは文学作品の普遍性を追求する作家の態度の現れとして捉えられてきた。しかしながらこのような説明は、歴史的出来事への言及に満ちた『最初の人間』には該当しない。これまでの『最初の人間』研究においては、この小説の歴史的事件への言及は当時の時事的問題であったアルジェリア独立戦争との関わりで語られることがほとんどだが、ではなぜそれまで「歴史」を否定し、アルジェリアを「過去のない土地」として描いていたカミュが『最初の人間』であらたに「歴史」を小説構造に取り入れようとしたのか。この問題を考えるには、執筆背景となる時代状況とカミュの政治的発言を視野に入れたうえで、作家の歴史認識と小説創造との関係を再検討する必要があるのではないか。本論文では、カミュの「反歴史的」歴史認識が、どのように小説に反映され、当時の時代状況との関連においていかなる意味をもっていたのかを時系列的に分析した。

第一章：「歴史」の不在と小説創造の問題

はじめに、処女小説『異邦人』(1942) に至るまでの文学的行程を辿り、カミュの「非歴史的」思考が、作家の約10年にわたる習作時代の小説創造にどのような困難をもたらしていたのかを検討した。従来、カミュの初期作品における「歴史」の不在は自明のものとしてそれ以上論議が深められることはなく、特権的瞬間や現在時の称揚といった主題だけが注目を浴びていた。しかしながら、カミュが小説家を目指して『異邦人』を完成させるまでの10年間という習作期間、あるいは『裏と表』(1937) が本来エッセイではなく、小説作品として構想されていたことを考慮に入れると、カミュの「非歴史的」思考は、まず物語を内包する小説創造そのものに関わる問題では

ないかと考えた。そこで、『異邦人』を到達点として、『裏と表』、「ルイ・ランジャール」、『結婚』、『幸福な死』といった習作作品を分析し、カミュの文学的行程を小説創造の問題という観点から辿りなおした。そして、カミュが単に現在時への嗜好だけでなく、それを持続した時間にまで拡大しようという欲求、特権的瞬間から構成され、因果律から解放された現在時の生の連なりを小説として描こうという欲求をもっていたこと、さらにそうした作家の小説美学が、物語としての因果関係にもとづき、過去の出来事を語るという小説の形式的要求とは相容れないものだったことをあきらかにした。

『異邦人』の小説としての成功の要因は、第二部の裁判を通じて「母の死を悼まなかったために死刑判決を受けるムルソー」という「偽の因果関係」を導入し、文学的工夫によって主人公の運命を悲劇にまで高めたことにある。カミュは『幸福な死』で排除した因果関係を第二部で一旦取り入れつつ、それを虚偽のものとして読者に提示することで、第一部で描いた現在時の継起に生きるムルソーの態度を真実の生として浮き彫りにしようとした。『異邦人』は「物語＝歴史」のあり方を否定する小説として成立しているのである。

第二部：カミュの政治的思索と「非歴史性」のモラル

「歴史」を排除したカミュの小説創造は、単に小説美学の問題にとどまらず、作家自身のモラルに裏付けられている。アルジェリアを舞台にした『異邦人』はその「非歴史性」ゆえに普遍性を獲得し、評価されてきたが、サイードを代表とするポストコロニアル批評によって、今度はその「非歴史性」ゆえに、植民地主義的状況を隠蔽したとして断罪されることになった。こうした風潮に対して、カミュ研究者は作家の反植民地主義的政治活動を引き合いに出し、他方『異邦人』を純粋な文学的フィクションとして捉える必要性を訴えて反論した。とりわけこれまでのカミュ研究において、『異邦人』における「歴史の不在」は、作家による政治と文学の明確な区別の証左だと考えられる傾向にあった。だがカミュが政治の場においても「歴史」を否定していることを考慮に入れるならば、むしろ『異邦人』における「歴史の不在」にはカミュの政治的思索の痕跡がしるされていると考えるべきではないだろうか。

そこで、当時のカミュの代表的な政治テクストとして「土着の文化、新しい地中海文化」(1937) をとりあげ、このテクストと照らし合わせて『結婚』や『異邦人』を再検討した。また、ルイ・ベルトランを代表とする1920年代、30年代のアルジェリアの文学動向を視野におさめることで、カミュの文学作品における「歴史」の排除が、かつてアフリカを支配していたローマ帝国を歴史的根拠とし、フランスによるアルジェリア征服を正当化しようとする当時の植民地主義的言説を念頭に置いたものであることを明らかにした。

『異邦人』の小説世界は作家の政治的思索と切り離された単なる文学的虚構ではな

く、「土着の文化、新しい地中海文化」で提示された、「歴史」に依拠しない理想のアルジェリア像を体現したものだと考えることができる。その一つの証左となるのがムルソーをはじめとする地元住民が共有する「男のモラル」である。ポストコロニアル批評以来、ムルソーの殺人場面はヨーロッパ系住民とアラブ人との民族間闘争の場としてのみ考えられるきらいがあったが、この争いで問題になっているのは、人種間の闘争ではなく一人の男と一人の男の間の闘いなのだ。『異邦人』では当時のアルジェリアの植民地的状況を反映するかのように様々な人種の登場人物が配置されているが、すべて「一人の人間」として描かれている。

作家のこの時代における政治と文学を結び付けるのは「無関心＝無差異」のモラルである。これはあらゆる差異や対立を突き崩そうとする態度であり、「歴史の否定」もこのモラルと通底している。カミュは政治の場において「歴史」に対して「無関心」な「自然」のあり方を模範とすることを主張するが、この「自然の無関心」は根本的な意味において、差異化を前提とする人間存在のあり方とは矛盾する。だがこの「自然にならった生き方」を実行していた例外的な人間が作家の「無関心な」母親だった。『異邦人』の物語は、主人公がこうした自然や母親の「無関心」を自身の生き方の模範として内在化する過程として捉えることができる。

第三部：「歴史」への参入

つぎに問題となるのは、第二次世界大戦勃発から『最初の人間』執筆にいたるまでのカミュの「歴史」をめぐる思索の軌跡である。「歴史」を排除することで自らの小説世界を構築してきたカミュが、なぜ『最初の人間』で「歴史」を導入するにいたったのか。この問題を考えるにあたっては、第二次大戦を契機にアルジェリアからフランスに渡ったカミュが直面した歴史的状況、そしてその状況をめぐってフランス知識人との間で繰り広げられた数々の論争も考察しなければならない。本論文では特に、対独協力派粛正問題をめぐるモーリヤックとの論争、『反抗的人間』を契機としたサルトルとの論争、そして『ペスト』の歴史記述をめぐるバルトとの論争を中心に据え、この時期のカミュの政治テクストを時系列にそって検討し、その変遷を追った。

では、なぜカミュは『最初の人間』ではじめて小説に「歴史」を導入するにいたったのか。これは直接的な契機としてアルジェリア独立戦争の勃発があることはもちろんだが、それ以上にサルトルやバルトとの論争が大きな影響を及ぼしていると考えられる。モーリヤックとの論争、そして第二次大戦後の東西冷戦という歴史的状況を経て、カミュの「歴史」批判はゆるぎないものとなった。しかし、「歴史」を排除したカミュの初期作品はサルトルに事後的に批判され、さらに『ペスト』の寓意的歴史記述はバルトに批判された。こうした状況のなかで、カミュがあらたに小説作品を執筆しようとするとき、無反省的に「歴史」を排除するとは考えにくい。歴史認識をめぐるカミュの考察の終着点として『最初の人間』を捉えるならば、その執筆の真の目的は

「非歴史的」と批判された自身の歴史認識、あるいはカミュが主張する歴史的論理の無効性を、「歴史」を導入しつつ表明し、文学として昇華することにあったのではないかと考えられる。

第四部：歴史、記憶、忘却 ―「反歴史的」歴史小説としての『最初の人間』

ここでは具体的に『最初の人間』を分析し、この未完の小説の中に、「歴史」を導入しようとする意志と、「歴史」を絶えず非歴史的なものに回収しようとする反対の欲望が対立しつつも同居していることを明らかにした。歴史的時間の挿入、時間の重層化、歴史的射程の広さ、数々の歴史的事件の組み入れといった『最初の人間』に見られる新しさは、それまで不在の者として扱われていた「父」に焦点があてられることで可能になっているが、この小説は「父の不在」を証明して終わりを告げる。父親の探索を通じて過去を掘りおこしながらも、むしろ歴史に名を残さないアルジェリアのフランス人たちの無名性と過去の不在が強調される。だが一方でこの「過去の忘却」は、主人公による「過去の忘却からの救済」という反発を生む。そして数少ない証言を基にしたジャックの想像と回想を通じて、忘却される運命にあるジャックの家族と入植者の約百年に渡る歴史が断片的に描き出される。この小説で描かれる「歴史」はフランス側からではなくアルジェリア側から見た「歴史」である。そして異なる時代の人々や事件が共通のイメージによって無関係に次々と繋げられることによって、過去の出来事は因果関係を取りむすぶことがない。

「過去の忘却」と「過去の忘却からの救済」という相反する二つの方向性は、主人公および作家のアイデンティティの二重性を反映しており、この小説における「反歴史的」歴史という矛盾した歴史記述の原動力となっている。そしてこの小説における「非歴史性」を象徴するのが「歴史」を知らない、歴史性に左右されることのない真理を体現する者として描かれている母親である。父の探索は父の不在の確認と母親の再発見に終わり、個人の生は先祖へと結びつかず、さまざまな歴史的事件が描かれながらも、母の「歴史」へのまなざしによって「歴史」は相対化され、その連続性は断ち切られる。『最初の人間』は、「歴史」の権能を相対化する「歴史小説」として成立しているのである。

結論

カミュの初期作品から『最初の人間』に至る文学的行程は、彼の歴史認識の漸次的変化と切り離して考えることはできない。現在でもカミュが政治的文脈においてしばしば批判や誤解の対象となってしまうのは、作家がアルジェリアで育み、その後生涯を通じて練り上げていった「非歴史的」歴史認識が、正確に理解されてこなかったからである。

『異邦人』が「罪」と「贖罪」が不在の「非歴史的」世界を描いたのに対し、『最初

の人間』は、歴史的事実を取り込みつつ、母、家族、アルジェリアという「非歴史的」な存在に焦点を当てる。こうした文学的努力のうちに、「歴史」によって有罪宣告された植民者たちに、再び無垢性を与えようとする作家の意志を認めることができるのではなかろうか。

（論文審査の結果の要旨）

千々岩靖子氏の論文「アルベール・カミュにおける歴史認識の問題」は、1931年に執筆された最初の小品「ある死産児の最後の日」から1960年に遺作として残された未完の小説『最初の人間』にいたる作家カミュの歴史認識の全行程を年代順に跡づけ、この問題を評論と創作の両面から総合的に考察した労作である。論者は、カミュの歴史意識を解明するため、作家の政治・社会的活動の全体（アルジェリア時代の共産党員およびジャーナリストとしての活動、第二次世界大戦勃発時における夕刊紙「ソワール・レプュブリカン」への寄稿、「コンバ」編集長としてのレジスタンス運動と「ドイツ人の友への手紙」、対独協力者粛正に関するモーリヤックとの論争、共産主義批判をめぐるサルトルとの論争など）を詳しく再検討したうえで、そこに表明された歴史と人間に関する認識がどのように創作と共鳴しているかを主要作の綿密な分析にもとづき考察した。

千々岩氏の論文の長所として第一に挙げるべきは、本主題をめぐる調査が網羅的であり、フランス語原文の読解が正確で、その解釈が妥当なことである。論者は、カミュに関する先行研究を渉猟して最新の研究成果をとり入れたばかりか、非合法紙「コンバ」など当時の新聞雑誌をはじめ、2006年から2008年にかけて出版された新プレイヤッド版『カミュ全集』全4冊にはじめて収録された初期作品「ルイ・ランジャール」のテクストや『最初の人間』の創作メモなどの資料、さまざまな回想録などを詳しく検討した。そのうえで作家が1958年3月から4月にかけて生地モンドヴィを再訪したという従来の伝記や年譜に記されていない事実を突きとめるなど、その調査は詳細を極める。膨大な文献を綿密に調査し、それを充分に咀嚼したうえで、性急な断定をさけ、作家の立場と記された資料の微妙なニュアンスを正確に描きだすことに成功した点は、きわめて高く評価できる。

カミュをめぐるさまざまな論争を通じて作家の歴史認識を明らかにする場合でも、論者の指摘は、冷静かつ的確である。アルジェリアの庶民階級に生まれ育ったフランス人というカミュの自己規定にあらためて注意を喚起し、作家が理想としたのは民族対立をこえた「新しい地中海文化」だと指摘したうえで、『異邦人』の主人公ムルソーおよびカミュを「植民地主義者」として批判したサイードらのポスト・コロニアル批評が誤りであることを指摘した点や、モーリヤック、サルトル、バルトとの論争を再検討し、論争相手の立場を充分に斟酌したうえで（モーリヤックのキリスト教信仰とドゴール崇拝、サルトルが試みた第三の道の挫折、初期のバルトが信奉していたマルクス主義とアンガージュマンなど）、本人の微妙な立場と勇み足まで指摘して作家の歴史認識を正確に描きだしたバランス感覚には、研究者としての優れた資質がうかがえる。

カミュの政治・社会的活動を通じて歴史認識を明らかにする探求がおのずと文学作品の解釈へとむかう構成も、本論文の特筆すべき特徴といえる。第一部では、青年作

家にとり憑いていた「歴史不在の時間」認識 が「反歴史」の物語としての『異邦人』に結実したこと、第二部では、アルジェリア時代に培われた「非歴史性のモラル」が『異邦人』の「男のモラル」「無差異のモラル」を生み出したこと、第三部では、レジスタンス運動をへて共産主義批判へと転じた作家の歩みが小説『ペスト』の意義を明らかにすること、第四部では、作家の反歴史的な歴史認識が遺作『最初の人間』にとりこまれたことを論証した。作家の政治・社会活動にあらわれた歴史認識と、文学作品の意義の双方を総合的に明らかにしようとする野心的試みで、これも高く評価できる。

厳密かつ柔軟な論旨の展開、的確な引用や論拠の提示、注に記された細かな補足事項など、全体として完成度の高い論文であるが、疑問点もなしとしない。『最初の人間』を分析するにあたり論者が援用した「歴史小説」の定義など、再検討を必要とする箇所もある。『最初の人間』のテクスト分析が不充分なこと、カミュの演劇作品が充分に論じられていないことなど、課題も残る。しかしこれらは論者の今後の研究課題とすべきところであり、本論文の価値をなんら損なうものではない。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。2010年2月10日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。